



「気候変動と低炭素社会
(サステナビリティ学2)」

小宮山 宏・武内和彦・住 明正・
花木啓祐・三村信男 編
東京大学出版会

2010年9月, 174頁, 2400円(本体価格)
ISBN 978-4-13-065122-6

本書は、今、もっとも注目を集めている新しい学問分野であるサステナビリティ学を体系的に論じた叢書の第2巻である。

叢書全体は以下の構成になっている。

- 第1巻 サステナビリティ学の創生
- 第2巻 気候変動と低炭素社会
- 第3巻 資源利用と循環型社会
- 第4巻 生態系と自然共生社会
- 第5巻 持続可能なアジアの展望

叢書の「刊行にあたって」では、「地球環境と人類社会の持続可能性への展望を示すことは、それが危機的状況を迎えている21世紀において、学术界に課せられたもっとも大きな課題である。」と述べ、さらに、「複雑な問題を俯瞰的にとらえ、長期にわたる問題解決へのビジョンを提示するために欠かせないのが、知識と行動の構造化である。」とも述べている。この叢書では、地球持続性を脅かしている気候変動、資源枯渇、生態系劣化などの諸問題を克服し、持続型社会構築に向けた新しいパラダイムの創造に貢献することを目的としている。

第2巻である本書では、21世紀に構築すべき持続型社会（低炭素社会、循環型社会、自然共生社会の融合社会）の社会像の一つである低炭素社会の現状とめざすべき社会像について、検討を行ったものである。以下に目次を示す。

序章 20世紀はどんな時代であったか、21世紀はどんな時代になるのか？

- 第1章 気候変動と IPCC
 - 国際的観点で評価する—
- 第2章 気候変動と気候モデル
 - 過去から未来を予測する—
- 第3章 気候変動問題をめぐる政治・経済・社会
 - 持続可能な低炭素社会へ—
- 第4章 気候変動への適応

—対応戦略を提案する—

- 第5章 低炭素社会実現への道筋
 - 日本のビジョンを示す—
- 第6章 低炭素都市づくり
 - 新たな都市計画の構築—
- 終章 明日に向かって

第1章から第6章までは、各章の副題にその内容が端的に示されており、気候変動に関する多方面の学問分野の最先端の現状が簡潔にまとめられている。評者にとっては、普段あまり目にする事の少ない第3章などが、非常に興味深かった。

本書の特徴を顕著に示しているのが序章と終章である。著者の考え方が色濃く表れており、非常に興味深く読んだ。

序章において示されている著者の考えのいくつかを、以下に列挙にする。

- ・20世紀は、発展・拡大の世紀であり、戦争の世紀。世紀後半のパラダイムは、「大量生産・大量消費・大量廃棄」。
- ・21世紀では平和の世紀を実現する必要。「足るを知る」サステナブルな社会へパラダイムを構築しなければならない。
- ・サステナブルな社会の実現の根幹には世代の衡平性という概念がある
- ・日本全体の社会システムの再設計。いまこそ、21世紀を生き抜く新しい「新日本改造論」を提案すべきときである。

また、終章にも本書を総括して、著者の考え方が表明されている。以下に重要な著者のメッセージを示す。

- ・「現在の諸問題を解決する方策がない」のではない。できる限り多くの人々が納得する形態で問題を解決していくことが困難。
- ・自らの才覚で参加し、結果として、目標が達成されるような社会システムづくり。
- ・知識を行動に移すためには、もう一步の納得と覚悟が必要。
- ・これまでは、新大陸の発見、産業革命以降の科学技術の発展等、新しい時代が開かれ、問題の次元が変わることによって、問題そのものの性質を変えることによって対応。世界はおおきな社会変動を通し調整されてきた。
- ・人類は20世紀という戦争の世紀を経験してきた。大

きな調整過程を経ることなく、今後の社会の設計を行うことが可能と思われる。それ以上に、そのことを行うべき責任がわれわれには存在する。

- 20世紀後半の「未来が現在よりもよくなる」という成長を信じてきた時代は、人類の歴史のなかでめずらしいことである。このことをよく自覚して、将来社会の設計に備える必要がある。
- 過去のどんな時代でも、先がわかっていて時代が進んできたわけではない。多くの人の試行錯誤のなかから、新しい社会の姿がかたちづくられてきた。
- 将来に対する「不安」を克服するには理解にもとづく納得と覚悟しかない
- 本書では、地球温暖化問題の解決を志向する低炭素社会の実現に向けての科学的な知識から、具体的な

方策までの知見が載せられている。しかし、ここで与えられている知見は、解答ではない。これらの知見を習得し、自分の頭のなかで咀嚼することを通して、自分で自分なりの納得と覚悟を形成していくしか方法はないのである。

- 考えるべきは将来の日本の国家のあり方、①国際舞台における日本の将来の位置取り、②少子高齢化の現実を見据えての将来、③産業構造の変化。

上記の問題提起に対する解答は、各会員が本書を読まれて自ら考えることに尽きる、と評者は思っている。一読に値する書物である。

((財)日本気象協会 藤谷徳之助)